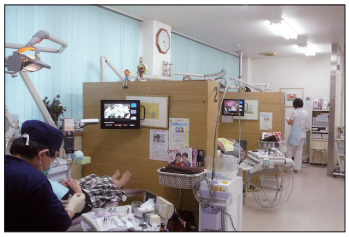
「見える化」し、認識を共有。患者さんと一緒にQOLの向上に取り組んでいます。

医療法人社団 尚誠会 ホワイト歯科医院　香川県坂出市
抗加齢医学会 専門医 山地誠治 代表理事長
（坂出市歯科医師会副会長・坂出学校保健会副会長）

Evaluation vol.23

定期管理型歯科医院から、ヘルスプロモーション型歯科医院へ



使用しているアールエフ製品

- ワイヤレス口腔内カメラ：Einstein Stella x3 ／Einstein Sapana x4
- チェアサイドモニター：Doctor's Station x4
- ポータブルデジタルX線センサー：DX-150 x1
- 受信機：Morse-type S x1

予防分野を独立、ヘルスプロモーション型歯科医院へ

私が歯周病科出身という事もあり、20数年前から歯周病を中心としたメンテナンス管理を行ってきました。平成17年からは、治療と予防が混在していた状況を見直し、DH（歯科衛生士）の希望により予防分野を分離。その時ミーティングで決めたのが「見える化」・「仕組み化」・「チーム診療の徹底」という3つの目標です。同時に、予防分野には口臭治療、ドライマウス治療、オーラルアンチエイジングドッグを導入し、10年前から行っているホワイトニングも仕組み化して充実を図りました。今では、予防を目的とした健康な方の来院も多くなっており、更にヘルスプロモーションの理念に基づく、QOL（Quality of Life）重視の歯科医院になろうと取り組んでいます。

削る・詰めるの治療型から、情報提供型治療へ

予防分野にQOLの向上を図る取り組みを導入したことで、これまで狭かった歯科の分野を歯・歯肉から口腔へ、口腔から全身へ、全身から生活習慣・生活環境へと、広げることが可能になってきています。口腔内からわかる全身情報を、デジタル化した映像・唾液検査を中心に「見える化」し、自らの健康をコントロールしながら改善できる情報を提供しています。

手鏡から、口腔内カメラへ。利便性と機動性にカルチャーショック。

アールエフの口腔内カメラについては、東京で勤務していた歯科医師から聞きました。さっそく瀬戸内海を渡って大阪のショールームへ。カルチャーショックを受けました。口腔内カメラとモニターは無線でつながりますし、必要に応じて患部を拡大し、手鏡の代わりに口腔内の状態をモニターで見せながら治療の説明ができます。説明を重視する当医院にとっては、画期的なものでした。10年以上前に導入したのはカート式のY社の口腔内カメラ。その後、歯垢も見えるというM社の口腔内カメラを導入しましたが、どちらも十分な活用には至りませんでした。最大の原因は口腔内カメラが有線であること。機動性に欠ける上、撮影開始に時間がかかり操作が面倒、DHも使うのをやめてしまいました。

治療室でも予防室でも、患者さんと認識を共有

現在治療室には、ドクターズ・ステーション（モニター）と口腔内カメラのセットが4台あります。画像はSDカードに保存できるので他社製品との連動も手軽。また予防室には3台のチェア全てに口腔内カメラを設置し、フルに活用しています。画像はM社のディゴラ（デジタルX線画像診断システム）に取り込んで、個人カルテと一緒に保存しています。口腔内カメラやモニターを使うことで、視覚化して口腔内や歯肉の状態を説明できますし、治療前・治療後も拡大して表示できるので、患者さんと認識を共有しながら治療をするという方向性が確立しました。

これからは窓口を多彩にし、具体的な提案を行いながら健康な方々のQOL向上を図ることが必要です。その一つがまさに、アールエフの口腔内カメラとドクターズ・ステーションと言えるでしょう。